

● 論文 (査読を経たもの)

目覚めたら夢はなかったことになるのか

諸岡優鷹

目次

0. 問題
1. マルコムの議論
2. マルコムの議論の要点——言語ゲーム
3. 言語ゲームの観点の問題
4. 言語ゲームからはみ出す現実

キーワード

夢 (dream)
現実 (real)
夢の懐疑 (dream scepticism)
ノーマン・マルコム (Norman Malcolm, 1911-1990)
言語ゲーム (language-game)

● ARTICLE (REFEREED)

Did Not Incidents of Dreams Take Place at All?

by YUTAKA MOROOKA

0. 問題

知識の問題に立ちはだかる問題としての夢の懐疑

夢から目を覚ましたとき、自分がたった今まで経験していたことが、現実ではなく夢だったということが分かって驚くことがある。あるいは、夢から目を覚ましたと思ったら、それすらも実は夢で、そこからさらに目を覚ますということがある。また、「これは夢ではないのか。いや間違いなく現実に違いない」と確信したのに、そこから目を覚まして、実は夢だったということが分かって落ち込むということがある。

こういった夢を見ると、今自分が目を覚ましていて、夢を見ているのではないと思ってみても、そのことに明確な根拠がないことを思わせられる。それゆえ、いま自分は夢を見ているのではないか、という夢の懐疑を抱くにいたる。デカルトもまた、このように夢の懐疑にいたった1人である。

事実、私は着物を脱いで寢床のなかに横になっているのに、いつもどおりのこと、つまり、ここにいて上着を着て暖炉のそばに座っているということを、夜の眠りにおいて何度信じ込んだことであろうか？ いま私は、たしかに目覚めた目でこの紙を見ている。私が動かしているこの頭は眠っていない。この手を故意に、意識して伸ばし、感覚している。これほど判明なことは眠っている人には起こらないだろう。だがそれは、私が別のときに、眠りのなかで、やはり同じような考えによってだまされたことがないとも言わんばかりである。このことを注意深く考えてみるに、目覚めと眠りとを区別することができる確かな標識がまったくないことを私は明確に見てとって驚くあまり、この驚き自体が、私は眠っているのかもしれないという意見をほとんど私に確信させるほどである。(Descartes

[1641] 1642=2006: 36-7)

このデカルトの記述に見られるように、夢の懐疑は、現実だと思ひ込む夢を見たことがあるという過去の経験に裏打ちされていると考えられる。過去にそのような夢を見たことがあることに基づいて、現時点がそのような夢である可能性があるのでは

ないかと疑うのである。

デカルトの夢の懐疑は、絶対に疑いえない真理を得るためという動機に裏付けられている。疑う余地のない確実な真理を得るために、知識だと思われることをいったんすべて疑ってみるのである。デカルトは夢の懐疑を通して、疑いえない考える我の存在を見出すにいたる。この考える我の存在を出発点にして、デカルトは疑いえない知識を構築してゆこうとするのである。

デカルトに見られるように、夢の懐疑は確実な知識を求めることに立ちはだかる問題として哲学上取り上げられてきた。デカルトが夢の懐疑においてどんなことを問おうとしていたのかを詳細に検討したバリー・ストラウドもまた、夢の懐疑を「われわれを取り巻く世界についてわれわれがもっている知識をめぐる問題」に立ちはだかる問題として捉えている (Stroud 1984=2006: 14)。黒崎宏は次のように述べる。

夢が哲学史上に登場してきたのは、さきに申しましたように、懐疑論というコンテキストにおいて、だったのです。哲学者達は常に「真の存在」とか「真の知識」とかを求めています。したがって、この現実の世界 [……] が夢であっては困るのです。そこで、この現実の世界は夢ではない、という根拠を求めるわけです。(黒崎 1986: 79)。

このように、知識の問題に夢の懐疑が立ちはだかるとき、夢の懐疑は否定されるか、退けられることが求められる。そうでなければ、「われわれにはそういった知識はもてない、われわれを取り巻く世界については誰も何も知らない」ということになり、あらゆる知識というものが不可能になってしまう (Stroud 1984=2006: 14) からである。

別の形の夢の懐疑

だがここで、知識の問題に立ちはだかる問題として夢の懐疑を捉えるのではなく、別の仕方でも夢の懐疑を捉えてみたい。夢は、目覚めた後には現実ではないものとして消えてしまう。いま目覚めていると思っている現在もまた、ひょっとしたら夢であるかもしれない。そうであるとしたら、この現在もまた、夢のように消えてしまうのではないか。このような懐疑である。

夢は、確かに目を覚ました後には、現実ではないものとされる。現実ではないものであるから、それは現実の世界には回収されない。場合によって、それは全く生じなかったことであるとさえみなされる。

しかし、夢の中の出来事や、夢の中で体験したことは、一切なかったことなのだろうか。確かに、夢の中で怖い思いをした出来事や、夢の中で手に入れたものなどを、目覚めた後の世界の中で探しても、見つけることはできないだろう。だがしかし、そのことは、夢の中で怖い思いをしたということや、夢の中で何かを手に入れたということそれ自体が、なかったことだということの意味するのだろうか。

夢の中の出来事や、夢の中の体験は、なかったことにはならないと私は考えている。それゆえ夢というものは、目覚めた後の世界とは異なる形ではあれ、ある種の現実性を持つと思われる。

だが夢に現実性があるとすると、それは現在に跳ね返ってきて、現在もまたそうした夢なのではないか、という懷疑が生じるようになる。現在もまた、かつて見た夢のように、目覚めた後の世界に回収されずに消えてしまうのではないか。

本稿では、夢の懷疑を、知識の問題に関する問題としてではなく、このような問題意識に基づいて捉えることを目指す。そのために、『夢を見ること』(Dreaming)と題された、マルコムMalcolmの議論を参照することにする。マルコムは知識に関する問題に立ちはだかるものとして夢の懷疑を取り上げているわけではなく、夢を見るということがどういうことかに立ち返って議論しているからである。

マルコムMalcolmの議論とともに、マルコムと同様の議論を行っている黒崎宏黒崎 1986の議論を参照し、両者の議論に批判を加える。マルコムと黒崎はともに、ウイトゲンシュタインの言語ゲームを議論の土台としているのであり、問題は言語ゲームに厳密に従うことまで及ぶ。それを通して、別の仕方の夢の懷疑を提示することを試みる。そして、この夢の懷疑で問題になる現実がどのようなものであるのかを明確にしたい。

1. マルコムMalcolmの議論

概要

マルコムは、「これは現実ではなく夢なのではないか」と疑う夢の懷疑を棄却する。その理由は、実際に夢を見ているとしたら、その夢の中で、これが夢であるかどうかという判断を行うことはできないと考えるからであり、それゆえマルコムは夢の懷疑を無意味であるとする。以下ここでは、マルコムMalcolmの議論を順番に追っていくことにしたい。

他者の視点

まずマルコムは、断言するということを、「他者に向けて宣言すること」(Malcolm [1959] 1962: 8) であるとす。マルコムは、断言するということだけでなく、判断するということもまた、他者に向けて伝えることを必要とすると考える (Malcolm [1959] 1962: 9)。マルコムの議論において、何かを断言するということや、何かを判断するということが有意味に行われるとすれば、それは必ず他者に向けられたものだということである。

さらに、あるものごとの状態を記述した文が事実であると理解されるしは、そのものごとの状態が実在しているとき、そのときにのみ、その文が発せられるということだ、とマルコムは言う (Malcolm [1959] 1962: 9)。否定文の場合には、その状態が実在していないとき、そのときにその文が発せられるということである。つまり、ものごとを記述し、判断するためには、実際にどのようなことが生じているかを認識できるのでなければならない。

このように、マルコムの議論においては、何かを断言したり、何かを判断したりするときには他者の視点が必要とされている。その 1 つは、断言や判断が他者に向けて伝えられているということであり、もう 1 つは、断言や判断されている内容が他者にも認識可能だということである。

つまり、自分 1 人だけで何かを発言したり認識したりするのではなく、自他の共通性が必要とされているのである。この共通性は、マルコムの議論においては、眠っているということと矛盾する。当の自分が眠っているのであれば、他者と共通のものを認識することができないからである。認識の自他の共通性のためには、目覚めていなければならないのである。

眠っている人が「私は眠っている」と言うことができるか

ここでマルコムは、眠っている人が「私は眠っている」と判断することが可能であるかという問いを立てる。マルコムは不可能であると結論づける。眠っているという状態と、「私は眠っている」という文が真であるということが矛盾するからである (Malcolm [1959] 1962: 10-1)。

もし「私は眠っている」という文が真であるなら (本当に眠っているなら)、眠っているはずのその発言者が、眠っていながら自分のその状態に自覚的であるはずがない。眠っているときに意識はないからである。あるいはもし、自分の状態に自覚的であるとすれば、その人物は実は眠っていないということの意味するのであり、そのとき「私は眠っている」という文は偽である。

ゆえにマルコムは、眠っている人が「私は眠っている」と判断することは不可能であると結論づける。そしてマルコムはこの議論を敷衍し、判断するということが自体が、そもそも眠っている間には不可能だと言う (Malcolm [1959] 1962: 36)。判断するということが、自分の言うことに自覚的であることを必要とするからである。自覚的であるなら眠っているのではなく、眠っているのだとすれば自覚的ではありえない。

夢の中で判断は可能か

しかし、眠っている間に見る夢の中で、例えば「空が青いな」と考えたり言ったりすることがある。この思考や発言は、判断なのではないか。眠っている間に、夢を見るときで、判断することはありうるのではないか。

マルコムはこうした問いにも否定的に答える。つまりマルコムは、夢の中において何かを考えていたように思えたとしても、それは判断ではない、とするのである。

マルコムの議論において、何かを判断すると言えるためには、その内容が他者に伝達可能であり、判断されている内容が他者にも認識可能でなければならない。しかし、眠っている人が睡眠中にイメージを抱いたりしたとしても、他者は、その眠っている人がイメージを抱いているということを知ることはできない (Malcolm [1959] 1962: 45)。それゆえ、たとえ夢の中で何かを考えたり発言したように思えても、それを判断であると言うことはできないのである。

夢の出来事の位置づけ

マルコムは、夢を見るということの規準を、眠りから覚めて夢を物語ることだとする (Malcolm [1959] 1962: 49)。ある人が眠っており、そこから目を覚まして夢について物語る。その語りを聞いた人は、さっきまで眠っていたこの人は夢を見たんだな、ということを理解することができる。

ここでも他者の視点が必要とされている。もし、人が夢を見たかどうかということが、ある内部状態であるとする、問題が生じてしまうからである。つまり、「どのようにして異なる人々の内部状態が同じであると決定できるのか、そしてその結果、「夢を見ること (dreaming)」という語によって彼らが同じことを意味するとどうして決定できるのか」という問題が生じてしまうからである (Malcolm [1959] 1962: 54)。それゆえ、夢を見ることの規準として、「夢を見た」と言う、当人の証言や印象は使えない (Malcolm [1959] 1962: 54-5)。マルコムはワイトゲンシュタインの「〈内的な出来事〉は外的な基準を必要とする」(Wittgenstein 1953=1976: 304 第1部 580節) という言葉に従い、夢を見るということの規準に、他者の視点を要請するのである。

しかしそれでは自分自身が夢を見たということを、自分 1 人で自覚することはできないのだろうか。実際に、ある出来事が起きたという印象を伴って目を覚ましたとき、その出来事が実際に起きたことなのか、それとも夢だったのか分からなくなることがある。マルコムによれば、そうしたときに自分が夢を見たということに気付くためには、その出来事が起こらなかったということを見つけ出せばよい (Malcolm [1959] 1962: 51)。

この意味で、ある出来事が夢の中で生じたということを学ぶということは、その出来事が睡眠中に生じたということを学ぶということではなく、反対で、その出来事が全く起きなかったということを学ぶということなのである。(Malcolm [1959] 1962: 51)

目覚めたときに、ある出来事が起きたような印象を抱いていたとする。それが実際に生じていれば、それは夢ではなく実際の出来事の記憶であり、実際には生じていなければ、それは夢だったということになる。

出来事が実際に生じたかどうかを確かめるのは、目覚めた後の世界、つまり自他が共通に認識し、自他が共通に生きる世界である。生じたかどうか確かめたい出来事が、この世界に位置づけられなければ、それは夢だった、ということになるのである。

夢という言葉の公共性

マルコムは、夢という語を子どもに教える場面を以下のように想定している¹⁾。

子どもが、何ひとつ真実ではありえないような、自分の見たものやしたこと、さまざまな考えを、眠りから覚めた後で私たちに話すとすれば、さらに、それらの出来事についての子どもの話には自発性があって、作り話をしている様子がないとすれば、そのとき私たちは子どもに「それは夢だったんだよ」と言うだろう。(Malcolm [1959] 1962: 55)

1) マルコムの師であったウィトゲンシュタインも同様の想定を行っている (Wittgenstein 1953 = 1976: 365 『哲学探究』第 2 部 vii 節)。マルコムの議論は、ウィトゲンシュタインのその想定を引き受けたものである。ウィトゲンシュタインの議論については、本稿の 2 節以降で取り上げる。

子どもの話す内容が真実であるかどうかの判断基準は、以上の議論に基づけば、子どもが話す内容が自他が共通に認識する世界で生じえるかどうか、である。もし自他が共通に認識する世界で生じえないことであるとすれば、その内容は「真実ではない」と考えられるだろう。

さらにここで注意すべきことが2点ある。1つ目は、子どもに「夢」を教える場面が、子どもが夢を見ている最中ではない、ということである。子どもが目を覚ます世界の中に、大人は生きている。その世界の中で、大人が、子どもに向けて夢という言葉をお話しているのである。

もう1つの注目すべき点は、眠りから覚めた後で話をする、という行為に対して夢という言葉をお話している、ということである。子どもが見ていたと思われる夢の内容に対して夢という言葉を与えるのではなく、目を覚まして話をするという、自他が共通に認識する世界の中でなされる行為に対して夢という言葉が与えられているのである。

それゆえ、「逆説的に思えるかもしれないが、夢を見ること概念は、夢を見ることにではなく、夢を説明することに由来する」(Malcolm [1959] 1962: 55) ののである。夢を見るということが、目覚めてから夢について語ることに先立つのではない。目覚めてから夢について語るということが、夢を見るということの概念を成り立たせているのである。

したがって、夢を見るという動詞は、まずもって過去形としての使用から教えられることになる。また夢という言葉は、自他が共通に認識する世界を出発点にしているのであり、公共的に機能する言葉なのである。

科学的研究への批判

マルコムは、人が夢を見ることの規準に他者の視点が必要であることを論じるが、夢の科学的研究に対しては批判を行っている。マルコムの批判は、眠っている間に生じる高速眼球運動 (Rapid Eye Movement: REM) と夢との間の関連の研究へ向けられる。

ウィリアム・C・デメントとナサニエル・クライトマンは、REM と夢との関連を研究し、夢を見るときにはREM が伴っていると結論づける (Dement&Kleitman 1957: 345)。

デメントとクライトマンの実験の1つは、実験参加者が報告する主観的な夢の長さ、計測されたREMの長さを比較するというものであったが、マルコムはこの実験について「決められた場所と物理的時間における期間を、夢が持たなければならないと想定する」(Malcolm [1959] 1962: 75) という誤りを犯していると批判する。マルコム

の議論においては、夢を見ることは、目覚めたときに抱えている印象に依存しているものであり、眠っていた人が目を覚まして夢を語るものでなければ、その人が夢を見ていたかどうかを判断することはできない。したがって夢は決められた場所や物理的時間における期間において生じるわけではないのである。

それゆえマルコムは夢の科学研究に対し、夢の概念に、夢の長さという考えを持ち込むことによって「古いラベルのもとに新しい概念を作り出している」(Malcolm [1959] 1962: 79) と批判する。マルコムはさらに、REM のような生理学的指標が新たな規準になった場合には、「夢」という概念を教える方法は大きく変わってしまうと指摘する。「子どもに夢を見ることの新しい概念を教えるためには、新しい規準を提供する生理学的実験の説明をしなければならない」(Malcolm [1959] 1962: 81) のである。マルコムは夢の科学研究を、このように批判する。

マルコムは、人が夢を見るということの規準に他者の視点を要請したが、その他者の視点は科学にまで至るほどのものではない。人が夢を見たかどうかを決定するために、他者の視点は必要だが、しかしそのことは、夢を見た当人の証言が必要ではないということの意味しないのである。マルコムの議論においては、人が夢を見るということの基準に、他者の視点と、目覚めた後の当人の証言の両方が必要なのであり、どちらか片方だけで、人が夢を見たかどうかを決定することはできないのである。

それゆえマルコムは、「夢の場合では「主観性」と「客観性」は一つなのであり、この区別を適用することはできない」と述べる (Malcolm [1959] 1962: 80)。夢を見ることに対するこの態度は、ウィトゲンシュタインの「〈内的な出来事〉は外的な基準を必要とする」(Wittgenstein 1953=1976: 304 第 1 部 580 節) という言葉に従う態度と呼応している。マルコムは夢を単なる主観的体験とみなすのではなく、客観的状态に還元するでもないのである。

夢を語る用法

睡眠中の夢に対して恐怖などの感情を抱くことがあり、その感情は目を覚ましてからも持続することがある。マルコムはこのことを認める (Malcolm [1959] 1962: 91)。感情を抱く場合、その感情を抱いたものごとや出来事が、普通のものごとや出来事であると思ってしまう傾向がある (Malcolm [1959] 1962: 95)。

夢の中に登場した物事や出来事や人物が、実際に存在するものだと思ってしまう理由は、夢を語る言語が普通の言語と同一だからである (Malcolm [1959] 1962: 94)。夢の中に兄が出てきたと思ったとき、夢の中の兄が、実際の兄と同一であると思ってしまうのは、「兄」という語を用いているからであって、夢の中に兄が出てきたと思っ

も、実際に兄に会ったわけではない。兄に会ったという出来事は、それが夢であるならば、目覚めた後の、自他が共通に認識する世界では生じていないのである。

このことをマルコムは「混同」と言い、2つの語りの用法を区別することを提案する (Malcolm [1959] 1962: 95)。1つは、歴史的用法 (historical use) であり、もう1つは、夢語りの用法 (dream-telling use) である。

歴史的用法は実際に起きた出来事を記述する語り方であるが、夢語りの用法はそうではない。「これこれの夢を見た」と語るとき、「～の夢を見た」という語り方は、「これこれ」の内容が実際には生じなかったことを指し示している (Malcolm [1959] 1962: 95)。

この2つの語り方を区別することで、夢の内容を語るときに、実際に起きたことのように思ってしまうことを防ぐことができるのである。

夢の懐疑は無意味である

マルコムは、夢の懐疑に答える1つの哲学説を取り上げ、それを検討する (Malcolm [1959] 1962: 101-13)。マルコムが取り上げるのは、現実には一貫性や整合性があるが、夢にはそれがないのであるから、夢であるかどうかを一貫性や整合性があるかどうかで判断することができる、という説である。マルコムはこれを一貫性の原則と名付ける。

しかし以上に見てきたように、眠っている間に「自分は眠っている」と考えたり、そもそも何かを判断すること自体が不可能である。マルコムは次のように述べる。

目覚めたときにある印象を伴っていて、それが夢に属するのか現実に属するのか疑わしく思ったとき、確かにその印象が、記憶や現在の知覚に調和するかどうかを考えてみるができる。したがって、一貫性は「私は夢を見たのか」という疑問に対しては目的になかった妥当性を持つが、「私は夢を見ているのか」という疑問に対しては全くそうではないのである。(Malcolm [1959] 1962: 113)

このように、眠っているということ、夢を見るということに関して、マルコムは現在と過去とを厳密に区別する。「私は夢を見たのか」、という過去についての疑問に関しては答えることができる。だが、「私は夢を見ているのか」、という現在についての疑問には答えることができないのである。

そしてそもそも、「私は夢を見ているのか」という問い自体が無意味であるとマル

コムは言う (Malcolm [1959] 1962: 118)。「私は夢を見ているのか」という問いが意味を持つためには、「私は夢を見ている」という文が有意味であるのでなければならない。しかし、「私は夢を見ている」と言うことはできない。それゆえ、「私は夢を見ているのか」と問うこと自体が意味を持たないのである。このようにマルコムは夢の懐疑を退けるにいたるのである。さらに、目覚めた後の、自他が共通に認識する世界は、夢であるとも現実であるとも言えないということになる。

2. マルコムの議論の要点——言語ゲーム

2つの要点

以上のマルコムの議論の要点を2つ挙げるができる。1つ目は、夢の内容を自他が共通に認識する世界から除外するということである。マルコムは、目覚めたときに抱いている印象について、自他が共通に認識する世界の歴史から除外されるものを夢と名付けているのであり、語りの歴史的用法と夢語りの用法を区別するように提案する。つまり、夢の内容を、マルコムは過去として認めていない。マルコムが過去として認めるのは、自他が共通に認識する世界内部の出来事だけであり、その一部としての「夢を見た」ということそれ自体である。

この立場はマルコムの言葉遣いにも表れている。夢の内容に関して、マルコムは「印象」という言葉を用いて、「記憶」という言葉を用いないように注意している。たとえばマルコムは、「目覚めたときにある印象を伴っていて、それが夢に属するのか現実に属するのか疑わしく思ったとき、確かにその印象が、記憶や現在の知覚に調和するかどうかを考えてみるができる」と述べて (Malcolm [1959] 1962: 113)、印象と記憶を区別している。

その理由は、記憶とは過去の出来事の記憶であることを意味するためである (Malcolm [1959] 1962: 56-7)。夢の記憶と言うとすると、夢の内容が過去に生じたことであるという意味になってしまう。しかしマルコムの議論においては、夢の内容は生じなかったことであるから、夢の内容に関して記憶という言葉を使用することができない。

要点のもう1つは、眠ること、夢をみることについて現在と過去とを区別するということである。「私は夢を見たのか」という、過去に関する疑問には答えることができるが、「私は夢を見ているのか」という現在に関する疑問には答えることができない。そもそも現在時点において「私は夢を見ているのか」と問うこと自体無意味なのである。

このように考えることによって、現実だと思ひ込んだ夢を現時点として考えると、この夢の懐疑は不可能になる。夢の内容は自他が共通して認識する世界の過去には生じなかったことなのであるから、それが実際に現在であるなどと考えることはできない。さらに、そもそも夢は目覚めた後に過去形としてしか考えられないのだから、現在形として、「私はいま夢を見ているかもしれない」などと考えることはできない。それゆえ、夢の懐疑は退けられるのである。

マルコムMalcolmの議論の中心

以上から明らかになるのは、マルコムMalcolmの議論の中心である。それは、自他が共通に認識する世界を基盤とした言語観である。

マルコムMalcolmの議論において人が夢を見ることの規準には、眠っていた人が目覚めたときに印象を抱いていることや、目覚めた後に夢を見たと言言するというだけでなく、その人が眠りから覚めるのを目撃し、夢について語るのを聞くという他者の視点も必要であった。どちらか一方だけによって、人が夢を見たということを決定することはできないとマルコムMalcolmは考える。

REM といった生物学的指標を夢を見ることの規準とするならば、夢の概念を教える方法は大きく変わってしまう (Malcolm [1959] 1962: 81) と言ったように、マルコムMalcolmは子どもに夢の概念を教える場面を重要視する。子どもに夢を教える場面は、眠りから目を覚ました子どもが、実際には生じえないような出来事の話をした際に、大人が「それは夢だったんだよ」と教える、というものであった。マルコムMalcolmの議論において、夢という語は、この場面に由来しているものであり、この場面に根差さずに、夢という語を使用することはできないのである。

目を覚ました後、自分が夢を見ていたということを自分1人で認識する際にも、夢に見た内容が、目覚めた後の、自他に共通に認識する世界の中で生じたことなのかを確かめなければならない。目を覚ましたときに、自分が夢を見たという印象を抱いていたとしても、その印象だけによって、自分が夢を見ていたかどうかを決定することはできないのである。自他が共通に認識する世界の内部において、夢を見たという当人の印象や語りと、その当人が眠っていた目を覚ましたことを認識する視点の2つが、必要となっているのである。

このように、マルコムMalcolmの議論においては、自他が共通に認識する世界が基盤となっている。自他が共通に認識する世界が出发点になって言語は学ばれるのであり、言語が有意味に使用されるのは自他が共通に認識できる範囲にかぎられるのである。

言語ゲーム

以上のマルコム言語観は、マルコムがワイトゲンシュタインの「〈内的な出来事〉は外的な基準を必要とする」(Wittgenstein 1953=1976: 304 第1部580節)という言葉に従っていることに見られるように、ワイトゲンシュタインに由来している。マルコムは、夢に関する以下のワイトゲンシュタインの一節を引用している (Malcolm [1959] 1962: 55)。

目ざめたあとである出来事を物語る人々 (自分たちはどこどこにいた、などと)。そこで、われわれは物語に先行すべき「わたくしは夢を見た」という表現をその人たちに教える。わたくしはそれから何度か「あなたはゆうべ何か夢を見たか」とかれらにたずね、肯定あるいは否定の答えを受け、ときには夢物語を聞き、ときには聞けない。それは言語ゲームなのだ。(Wittgenstein 1953 = 1976: 365 『哲学探究』第2部vii節)

自他が共通に認識する世界を基盤とし、夢という概念を教わる場面を重要視するマルコム言語観は、ワイトゲンシュタインがここで述べる言語ゲームだと言うことができる。

黒崎宏 (黒崎 1986) は、言語ゲームを以下のようにまとめる。

言語というのも、それが現実使用される生活の中でこそ一定の機能を有し、一定の役割を演じていますが [……]、生活の現場から離され、純粋な形で取り出されると、結晶のようになってしまいます。即ち、もはや生命を有しないただのインクのしみや音声になってしまうのです。したがって、言語というものの真の姿を見極めようとするならば、我々はそれを、それが埋め込まれ、織り込まれている生活の現場から、切り離してはいけません。そこでワイトゲンシュタインは、言語が埋め込まれ、織り込まれている生活を「言語ゲーム」と言い、言語は言語ゲームにおいて捉えられねばならない、と言ったのです。(黒崎 1986: 85)

言語ゲームの観点に立つと、言語の意味は、実際に言語が使用されている現場に根付くものであり、実際に使用されている現場を離れると無意味になる、ということになる。マルコムはまさに、自他が共通に認識する世界内部において言語は学ばれるのであり、有意味に語られうるのはその世界内部に限定されるとしたのである。

言語ゲームをこのように捉える黒崎は、マルコムが引用したワイトゲンシュタインの一節（『哲学探究』第2部 vii 節）を引用し、さらにマルコムの議論を参照しつつ、夢について議論している。そしてそれは、黒崎自身が述べるように、マルコムの議論と同じ結論である（黒崎 1986: 87）。それは、「現在の私の状態は夢である」とも「現である」とも言えない、という結論である（黒崎 1986: 87）。

黒崎は、「私は昨晚夢を見ました」と言うことを言語ゲームとして捉えるということは、そのような言明を生活の一齣として捉えるということ」だと言う（黒崎 1986: 86）。さらに、「私は今夢を見ています」や「私は今夢を見ていません」という言明に対しては、「現実の生活の中では、これらの言明は、使われる場所がありません。だからこそ我々は、それらの言明の使用を習う機会もなかったわけです。そうであるとすれば、それらの言明は無意味であるはずです」と述べる（黒崎 1986: 86）。それゆえ、「私の生きているこの現実の世界は夢ではない、とは言えない」のである（黒崎 1986: 87）。

黒崎もまた、マルコムと同様に、言語が実際に使用される生活の現場を基盤にし、有意味な言葉遣いを生活の現場での使用に限定するのである。

しかし黒崎はマルコムの議論を再構成しているだけではない。黒崎は、生活の現場が基盤となるとしても、それがさらに夢である可能性は否定できないと言い、生活の現場は「底が抜けている」と言う（黒崎 1986: 96）。しかし続けて、「真の基盤は、ほんとうは底が抜けていなくてはならない」と述べる（黒崎 1986: 96）。もしこの生活の現場に、真の底があるとすれば、その真の底こそが現実ということになり、生活の現場は現実ではなく夢だということになってしまうからである。

それゆえ黒崎は、「底が抜けているこの現実の世界こそが、我々の生活の真の基盤であると考えて、何の不都合もありません」と結論づける。「疑いも確信も、すべてこの現実の生活の中でのもの」だからであり、「その意味では懐疑論は、事実上意味を失っている」のである（黒崎 1986: 96）。

この生活の現場が、現実であるという証拠はない。この生活の現場は夢で、覚醒が生じるかもしれない。しかしそうであるとしても、そのように疑うのは、その生活の現場の中なのであり、生活の現場を現実だと見なさなければならないのである。そしてさらに、この生活の現場が夢で、覚醒が生じるかもしれない、と疑うためには、「疑うだけの理由がなくてはならない」のである（黒崎 1986: 97）。

3. 言語ゲームの観点の問題

言語ゲームへの批判

以上、ワイトゲンシュタインの言語ゲームに基づいた、夢に関するマルコムと黒崎の 2 人の議論を参照した。言語ゲームにおいては、自他が共通に認識する世界、すなわち実際に生活する現場が基盤となる。眠りから覚めたときに、何かの出来事の印象を抱いているとして、その印象に残っている出来事が、自他が共通に認識する世界で生じなかったことだと分かった場合には、それは夢だったということになる。夢の内容は、自他が共通に認識する世界内部では生じなかったことなのである。それゆえ夢に見た内容を、「これこれの夢を見た」という前置きを抜きに、有意味に語ることはできない。有意味に語られるのは、自他が共通に認識する世界、すなわち実際に生活する現場で生じることに限られるからである。夢に見た内容は、自他が共通に認識する世界の歴史から除外されるのである。

藤本隆志は、夢の内容を自他が共通に認識する世界の歴史から除外して過去を自他が共通に認識する世界内部の歴史に限定するマルコムの議論に対して、批判を行っている。夢の内容を、自他が共通に認識する世界の歴史から除外するということは、「覚醒した理性的営為の及ぶ範囲のみを「現実」と見立て」ている（藤本 1986: 75）ということであり、夢の中での出来事が「公共の基準によって確認できないために現実の経験とは峻別されるべきだ、というかれの論点は人間の経験を不当に狭く解釈してしまう」のである（藤本 1986: 74）。

この批判は妥当であると思われる。確かに夢の内容は自他が共通に認識する世界では生じなかったことであるかもしれない。しかし、藤本が言うように、夢の内容もまた、「私の経験のひとつ（時には重大な経験のひとつ）でありうる」（藤本 1986: 75）。

藤本はマルコムのみを批判の対象としている。しかしこの批判の対象はマルコムのみにとどまるものではないと思われる。マルコムの議論において、夢の内容が自他が共通に認識する世界の歴史から除外されたのは、マルコムがワイトゲンシュタインの言語ゲームを前提としていたからである。それゆえ藤本の批判は、ワイトゲンシュタインの言語ゲームにまで及ぶと考えられる。つまり、言語ゲームのみの観点で夢について捉えようとする問題が生じると考えられるのである。

以下、ワイトゲンシュタイン、マルコム、および黒崎の議論の一部を引き受けつつ、言語ゲームに基づいた夢の議論に批判的検討を加えたい。批判点は 2 つある。1 つは、夢という言葉や学ぶことについてである。マルコムは、ある出来事が夢の中で生じたということを学ぶということは、「その出来事が全く起きなかったということを学ぶということ」（Malcolm [1959] 1962: 51）だとしている。だが、日常的な観点では

別の解釈も可能なのではないと思われる。

批判点のもう1つは、目覚めた後の語り、夢を見ることそのものに先立つということについてである。日常的にはむしろ、夢をみるのが、目覚めた後の語りに先立つと考えられているのではないと思われる。

いずれの批判も、言語ゲームが、自他が共通に認識する世界、すなわち実際に生活する現場を出発点としているということに基づいていることへの批判である。つまり、そこが出発点となるより以前の地点があったのではないかと考えられるのである。その考えが正しいならば、その地点は言語ゲームをはみ出しているのであり、その地点が認められるならば、言語ゲームのみによって夢の懐疑を退けることはできないことになるとと思われる。

夢の出来事は全く生じなかったのか

マルコムは、眠りから覚めた子どもが作り話ではなさそうな話を物語る時、「それは夢だったんだよ」と教える、ということ想定していた (Malcolm [1959] 1962: 55)。ウィトゲンシュタインもまた、同様の場面を想定している (Wittgenstein 1953 = 1976: 365 『哲学探究』第2部 vii 節)。このような場面を繰り返すことによって、眠りから目を覚ましたときに何かの出来事の印象を抱いていたとしても、それが実際に起きたことであるとすぐには考えなくなるだろう。

さらにマルコムによれば、夢という言葉教わるときにそこで学ばれるべきことは、子どもが話す内容の出来事が「全く起きなかったということを学ぶということ」 (Malcolm [1959] 1962: 51) である。このように学ぶことによって、夢での出来事を除外することができ、子どもは自他が共通に認識する世界の歴史を考えることができるようになると思われる。

しかし、夢という言葉学ぶということがこのようなことであるとすれば、夢の内容は無かったことになる。夢で体験したことも無かったことになる。これは夢の内容についての日常的な考えとは大きく異なるのではないか。

たとえば、夢にある人物が登場し、心を揺り動かされたとする。あるいは、夢の中で、今まで体験したことのないような出来事を経験し、その経験に恐怖したり幸福感を抱いたりする。そのとき日常的には、その夢を通して、自分がその人物に対してどのような思いを抱いているかを理解したり、その人物に対する自分の思いに疑問を抱いたりする、と考えられているはずである。あるいは、夢の中で恐怖の体験をしたとか、幸福な体験をした、と考えられているはずである。このような考えは、言語ゲームが前提とする、自他が共通に認識する世界の観点とは大きく食い違う。

マルコム の議論によれば、これは語りの歴史的用法と夢語りの用法の混同だということになる。語り方を区別することで、夢の内容を自他が共通に認識する世界の歴史から除外することができる。

しかしそれでは、夢で得た理解や疑問、恐怖の体験や幸福な体験もまた、除外されなければならないのか。語り方を区別することによって、自他が共通に認識する世界内部で経験したもののみを手元に残すとすれば、夢で得た理解や疑問、夢の内容によって喚起された恐怖や幸福感といった感情を除外してしまうことになる。しかしそれでは、失うものが大きすぎるのではないか。

得られた理解や疑問、抱かれた恐怖や幸福感は、現にそこにあるはずである。マルコムが提案するように語り方の区別を行うとすれば、それらは自他が共通に認識する世界の中に居場所を失ってしまう。現にそこにあるにもかかわらず、居場所がなくなるのである。これはマルコム の議論の問題点であると思われる。

問題の原因は、夢の内容を、全く生じなかったとすることにある。確かに、夢の内容は自他が共通に認識する世界内部で生じたことではない。しかし、そうだからといって、それは全く生じなかったことだとは言えないのではないか。藤本は次のように述べる。

なるほど「夢の中で私は大きな音を聞いた」と報告することは「私は大きな音を聞いた夢を見た (と信じた)」と言うに等しく、それは現実に「私が大きな音を聞いた」ということを論理的に含意はしないのですが、しかしそれは同時に「私は大きな音を聞かなかったことを意味するわけでもありません。(藤本 1986: 75)

夢の内容が、自他が共通に認識する世界では生じなかったとしても、それが全く生じなかったとすることはできないと思われる。それゆえ、夢という言葉を学ぶことについて、マルコム の議論を修正する必要がある。

マルコムが意図したように自他が共通に認識する世界を保持しつつ、しかし夢についての日常的な観念も保持することは可能であると思われる。つまり、夢という言葉を学ぶということは、夢の中での出来事は夢という特殊な領域において生じたことだと学ぶことだ、と修正すればよいのではないか。

夢の中の出来事は確かに自他が共通に認識する世界の中での出来事ではない。実際に生活する現場において生じたことでもない。それゆえ言語ゲームにおいては、「これこれの夢を見た」という前置きなしに有意義にそれらを語ることはできない。

しかし、そうだからといって、夢の中の出来事が全く生じなかったとまで言うこと

はできない。言語ゲームに従えば、出来事が実際に生じるのは自他が共通に認識する世界内部に限定される。それゆえ夢の内容はどこにも位置づけられることなく、生じなかったことだとみなされることになる。

だが、客観的な世界に回収されないような特殊な領域があると考えたとすれば、夢の内容はそこで生じたと考えられるのではないか。このように考えるとすれば、マルコムが意図したように自他が共通に認識する世界を保持しつつ、さらに夢で出来事を体験するという日常的な観念も保持することができるはずである。このとき夢とは、言語ゲームが基盤とする、自他が共通に認識する世界の内部には位置づけられない、特殊な領域の名前であることになる。

目覚めた後の語りが先立つのか

言語ゲームでは、夢を見ることに対して、目が覚めてから夢について語ることが先立つと考える。マルコムは「逆説的に思えるかもしれないが、夢を見ること概念は、夢を見ることにではなく、夢を説明することに由来する」(Malcolm [1959] 1962: 55)と述べている。ウイトゲンシュタインもまた、「夢を見た」という過去形を用いており(Wittgenstein 1953 = 1976: 365 『哲学探究』第2部 vii 節)、黒崎はこの点に関して「夢は過去形でしか語れない、ということを示している」と述べる(黒崎 1986: 84)。

だが夢を見るということをこのように限定するということは、夢を見ることについての日常的な観念を大きく制限するのではないか。確かに夢を夢として認識するのは、目が覚めた後である。また夢という言葉を教えたり学んだりするのは、目を覚ました後の状態である。しかし夢を見るということは、必ずしも過去としてのみあるのではないように思われる。つまり、まず夢を見ることがあり、そこから目を覚まし、夢について語る、という順序がありうると思われるのである。「夢の内容を覚えている」や、「夢の出来事の記憶」といった言葉遣いは、日常的に用いられているからである。

もし、夢を、自他が共通に認識する世界に回収されない特殊な領域だと考えることが可能ならば、さらに夢を、自他が共通に認識する世界の歴史に回収されない特殊な過去だと考えることもできるのではないか。

マルコムは夢の内容について「印象」という言葉を用い、「記憶」という言葉を用いないように注意していた。それは夢の内容が過去に属さないからである。マルコムにとって過去とは自他が共通に認識する世界の歴史に属するものに限られていた。

しかしもし、特殊であるにせよ夢を過去として捉えることができたとすれば、夢の内容について記憶という言葉を用いることができるようになると思われる。そうすれ

ば、日常的な、「夢の内容を覚えている」とか「夢の出来事の記憶」という言葉遣いを保存することができる。

さらに、夢を過去として捉えることができるとすれば、それが現在時点である可能性を考えることができるようになるのではないか。

その特殊な過去が現在だったとき、それはまだ夢ではなかった。それが「夢」として捉えられるのは、目覚めが生じ、その後で夢の内容についての記憶を持っているのを自覚したときである。そのとき「それは夢だったんだ」と事後的に認識することになる。

それゆえ、「夢」について考えるとすれば、夢を見ることは過去形でしか語られないという言語ゲームの観点は正しいと思われる。ある印象が「夢」として認識されるのは、自他が共通に認識する世界においてであり、すなわち生活の現場においてである。そこにおいて、夢を見た、という過去形として捉えられるしかない。この観点では、夢を見たという認識は、事後的なものではない。その認識によって初めて、「夢を見た」という過去が作り出されるのである。

しかし夢が特殊な過去であると考えたとすれば、「夢を見た」という認識はやはり事後的なものであるように感じられる。ある出来事を体験しており、そこから目を覚まし、体験していた出来事の記憶が残る。目を覚ました後になってから、記憶されている出来事が夢だったということを認識する。これが日常적인見方なのではないか。

ここで時間が二重化している。1つは、特殊な過去から覚醒を経て夢の記憶が残るという時間である。もう1つは、目覚めた後の印象を出発点にして、夢を見ていたという過去を認識するという遡及的な時間である。前者が日常적인見方であり、後者が言語ゲームの見方である。

後者の時間は、自他が共通に認識する世界に立脚しており、そこで生じたことのみをその歴史とする。夢の内容はそこから除外されるが、夢をみたということ自体は、客観的な世界の歴史の内に含みこまれる。

一方、特殊な領域としての夢、特殊な過去としての夢を認めることができるならば、前者の時間が可能になると考えられる。前者の時間は、特殊な過去から、目を覚ました後の現在の間に覚醒が生じている。この覚醒は特殊な過去と、目を覚ました後の現在との間を切断する。

このように、2つの時間は互いに方向性が逆であり、過去を含みこむ時間と過去を切断する時間という差異があるのである。

4. 言語ゲームからはみ出す現実

2種類の現実

以上のように、特殊な領域としての夢、特殊な過去としての夢を考えることができるとするならば、夢の内容は一切生じなかったわけではないと言うことができる。夢の内容は、言語ゲームの基盤となる自他が共通に認識する世界、すなわち生活の現場には位置づけられないが、夢という特殊な領域に位置づけられる。そしてその特殊な領域は、自他が共通に認識する世界、すなわち生活の現場の歴史には組み込まれないが、特殊な過去として考えられるようになる。

言語ゲームの観点では、夢の内容は一切生じなかったことになるが、その夢の内容を現に見ているとき、そこで経験していること、そこで展開されている出来事は、まさに現実だったはずではないだろうか。この現実とは、しかし言語ゲームの世界には組み込まれない。夢の内容は、言語ゲームが基盤とする世界には位置づけられないからである。だがこの現実を言語ゲームの世界から除外するというのは失うものが多いように思われる。

それゆえ、言語ゲームの観点を引き受けつつ、同時に夢の現実性を認めるために、2種類の現実を区別する必要があると思われる。2種類の現実とは、特殊な領域、特殊な過去の現実性と、言語ゲームが基盤とする、自他が共通に認識する世界、生活の現場の現実性の2つである。ここでは、前者の現実性を〈現実〉、後者の現実性を「現実」と便宜上名付けることにする。

言語ゲームからはみ出す現実

夢から目を覚ました世界は「現実」であり、その「現実」において、自分が夢を見ていたということを認識する。言語ゲームの観点では、目を覚ました後の「現実」が出发点である。

しかしその夢は、その夢を見ているときは〈現実〉だった。〈現実〉は、「現実」の中に位置づけられない。それゆえ〈現実〉は、「現実」ではなく夢だったということになる。

だが、夢が、夢を見ていたそのときにはまさに〈現実〉だったということを考えると、「現実」もまた、実は〈現実〉であるのかもしれない。このことは、黒崎が、我々の生活の基盤は「論理的には、またもや夢が覚め得ることによって、いわば底が抜けている」（黒崎 1986: 96）と言ったことと同一である。

しかし黒崎は、「我々の生活の全ては、疑いも革新も、すべてこの現実の生活の中でのもの」と述べている（黒崎 1986: 96）。黒崎は厳密に言語ゲームが基盤とする世界

に留まっている。「現実」が〈現実〉である可能性をいったん考えつつも、〈現実〉を認めないことによって、「現実」の現実性を確保しようとするのである。

それゆえ黒崎のように言語ゲームに厳密に基づくならば、「現実」のみが認められるのであり、〈現実〉は認められない。言語ゲームが基盤とする、自他が共通に認識する世界、すなわち生活の現場で生じることに現実性が認められるからである。このように〈現実〉を認めないとするならば、「現実」もまた夢であるかもしれない、と疑うことは確かに無意味になる。

だが、以上に見たように、言語ゲームの観点に立ち、特殊な領域としての夢、特殊な過去としての夢を考えないとすると、多くのものが失われることになる。夢の内容、夢の中で体験したこと、夢によって抱いた感情が、「現実」から除外されることになるからである。藤本の批判にあったように、これは現実および人間の経験の領域を「不当に狭く解釈してしまう」ことである(藤本 1986)。

夢の中で体験したこと、夢によって抱いた感情は、確かに「現実」には位置づけられないが、一切生じなかったことではない。それらは特殊な領域としての夢において生じたのであり、特殊な過去としての夢において生じたのである。すなわち、それらは〈現実〉に生じたのである。この〈現実〉は言語ゲームをはみ出している。

まず夢を見ているという状態があり、その後に覚醒が生じる、という時間の観点に立つならば、このはみ出している〈現実〉が、むしろ出発点となる。〈現実〉を出発点とすると、〈現実〉は実は夢であった、という覚醒の経験が後に続く。覚醒の後で、事後的に、〈現実〉が夢であったと認識するという経験が、夢の懐疑をもたらすことになる。したがって、〈現実〉を認めるとするならば、「現実」もまた夢であるかもしれない、と疑うことは無意味ではなくなると考えられる。

黒崎は「疑うには、疑うだけの理由がなくてはならない」と述べる(黒崎 1986)。実際に、〈現実〉が夢だったということが明らかになった、という覚醒の経験があるとすれば、その経験が疑いの十分な理由になると思われる。

文献

Dement, William and Nathaniel Kleitman, 1957. "The Relation of Eye Movement During Sleep to Dream Activity: An Objective Method for the Study of Dreaming." *Journal of Experimental Psychology*, 53(5): 339-46.

Descartes, René, [1641] 1642. *Meditationes de prima philosophia*. (= 2006, 山田弘明訳『省

察] 筑摩書房.)

藤本隆志, 1986. 「夢と人間」 木村尚三郎編『東京大学教養講座 14 夢と人間』所収, 東京大学出版会, 51-76.

黒崎宏, 1986. 「ワイトゲンシュタインと夢」 木村尚三郎編『東京大学教養講座 14 夢と人間』所収, 東京大学出版会, 77-98.

Malcolm, Norman, [1959] 1962. *Dreaming*. London: Routledge & Kegan Paul.

Stroud, Barry, 1984. *The Significance of Philosophical Scepticism*. New York: Oxford University Press. (= 2006. 永井均監訳, 岩沢宏和・壁谷彰慶・清水将吾・土屋陽介訳『きみはいま夢を見ていないとどうして言えるのか——哲学的懐疑論の意義』春秋社.)

Wittgenstein, Ludwig, 1953. *Philosophische Untersuchungen*. Oxford: Basil Blackwell. (= 1976. 藤本隆志訳『哲学探究』大修館書店.)

Did Not Incidents of Dreams Take Place at all?

by YUTAKA MOROOKA

On waking up from a dream, I was surprised to know that what I had been experiencing was not real but a dream. Such an experience of awakening is the basis for skepticism about dreams. Descartes was one among the philosophers who had doubts about whether he was dreaming or not. This question leads us to the element of skepticism people have about dreams, whether they really occur or are fantasies of the mind.

Usually, this skepticism is considered a philosophical problem obstructing true knowledge about the world. True knowledge usually refers to knowledge about the real world. However, if a man cannot discard skepticism, he cannot understand the world at all, because a belief he regards as true knowledge may be only concerned with the unreal world, or dream world.

In this paper, I deal with skepticism about dreams not with regard to true knowledge about the world, but with regard to another problem as discussed next. On waking from a dream, the dream disappears. If the reality one faces on waking from a dream is also a dream, this reality will also disappear. Although that reality is real, it will eventually disappear. I am going to argue about this problem in this paper. For this purpose, I refer to the argument in the work titled *Dreaming* by Norman Malcolm.

Malcolm emphasizes that incidents and experiences in the dreams “did not take place at all.” According to Malcolm, the reality is the world one faces on waking up from a dream, and it is a world that others and I equally recognize. Incidents and experiences in dreams do not have any place in reality as per Malcolm. This argument of Malcolm is founded on Wittgenstein’s language-game in *Philosophical Investigations*.

However, while I am dreaming, the dream feels real. While dreaming, a man can be touched by things or he may face important situations, etc. These incidents and experiences in dreams are excluded from reality, as Malcolm argues.

However, this exclusion is an unjustified narrowing of the width of experience of men. I emphasize that dreams are certainly not real, as Malcolm argues, but they are a special kind of reality. There are two realities. Following the Wittgensteinian language-game to the letter gives rise to the problem that this view is incapable of treating the reality of dreams.

If dreams are a special kind of reality, it may be possible that in fact the real world one faces on waking up from a dream is also a special kind of reality. One can then have doubts on the reality to which one wakes up. If the reality questioned is the reality of dreams, this reality will

目覚めたら夢はなかったことになるのか

disappear, although it is real. This skepticism is what this paper attempts to deal with and it is different from knowledge about the world.